ぼくと じしん

「あっ…… まただ。」

じしんが きました。しんど６の 大きな じしんで，とても こわかったです。

ぼくは，子どもえんの 先生の おはなしを きいて ぜんいんで 校ていに にげて，まとまって いました。

なん日か まえに，ひなんくんれんで とつぜん サイレンの 音と ほうそうが なって ほんとうに じしんが おきたら かくれたり，にげたり できるように れんしゅうを しました。ぼくは，その ことを おもいだしました。ひなんくんれんの ときは，ほんとうの じしんじゃ ないので，ふつうに ひなん できました。でも，こんどの じしんは，こわくて しんじゃうかも しれない。まもって くれる ばしょは どこだろう。どこかに はしって にげるしか ない。もっと つよくて 大きな じしんが きたら，こんどは おうちも どうろも かいしゃとかも こわれて しまうかも しれないよ。おじいちゃんと おばあちゃんと おとうさんと おかあさんと おねえちゃんと いっしょに いる ときは，こわがらずに がんばって いられるけれど，もしも ぼく 一人で いる ときに，

ぐらっ，パリン，ガチャガチャに なって しまったら どう しよう。とっても こわかったです。

しんさいから ６か月，こんど 大きな じしんが きた ときは，近くに おかあさんとか となりの おばちゃんとかが かならず いるから，きっと 大じょうぶだよ。その とき，ぼくは だれかの ところに いるように しよう。

そう おもったら こわく なく なった。じしんが きても うまく にげて，こえを だして げんきに して いようと おもいます。

（作文宮城 60 号　特別編『あの日の子どもたち』より）